

堀直寄と新潟のまちづくり

正会員 新潟技術開発センター 小林 正 久

概 要

新潟の町は、信濃川の河口に出来た砂の島の上に誕生した。その誕生の時期は決して古いものではない。恐らく、1500年代初期の頃であつたろう。

1616年(元和2年)堀直寄が長岡の城主に着任すると、ここに大港湾都市を夢見て、都市計画を実施したのである。これが今日の新潟市の発端である。

以来、今日に至るまで、阿賀野川の合流、或は分流という大自然の恩恵や試練をくぐり抜け、堀直寄・牧野忠成の如き名城主に出会い、或いはまた、1843年(天保14年)幕府に上知されるや川村奉行の如き名奉行を迎える等。この一連の流れが、1858年(安政5年)日本の開港五港の一として選定され、1868年(明治元年)正式に開港されることになったのである。

このような歴史の流れの中で、新潟誕生がどんなものであったか、全たく不明なのである。

例えば、何時頃人が住みついたか。

何処から移住してきたのか。

どのような商売の人であったか。

等。

又、新潟には縦横に堀割りが掘られ、街区も整然と区画されている。これが堀直寄の町づくりの残された姿である。そう言われているけれども、直寄の考え方や道路、堀割りのつくられた意味については、これを知る人が非常に少くない。

新潟誕生の模様に、直寄の都市計画の様子を加味しつつ、古い新潟の姿を探究してみたものである。

1. 新潟のまち、誕生の特徴

現在の新潟の街には、取りたてて言うほどの特徴は一つ見えない。

城郭のような歴史的遺産もなく、文化財的な建造物も構造物も少い。わずかに信濃川、海岸砂丘に自然景観の面影を残すにすぎない。この自然景観も、昭和20年代までは砂丘の雄大な姿もみられ、信濃川にも何んとなく大河の様相がみられた。

更に、市内には西堀・東堀に代表される堀割が縦横に連なっていて、桜と柳に飾られながら、時には芸妓さんの濃艶な点景を加えるなど、港町新潟の情緒がつくりだされていた。

これ等のほとんどが、昭和30年代の新潟大火、新潟地震、地盤沈下等の大災害によって、その姿を消してしまった。あるものは実に平凡な近代化された市街地となってしまったのである。

このように、現在の新潟市は何等みるべきものは無いとは言うものの、その創草期に当っては色々な経緯が織り込まれている。

そのことを、次の三点に分けて考えてみたい。

- 自然的条件
- 人為的条件
- 歴史的条件

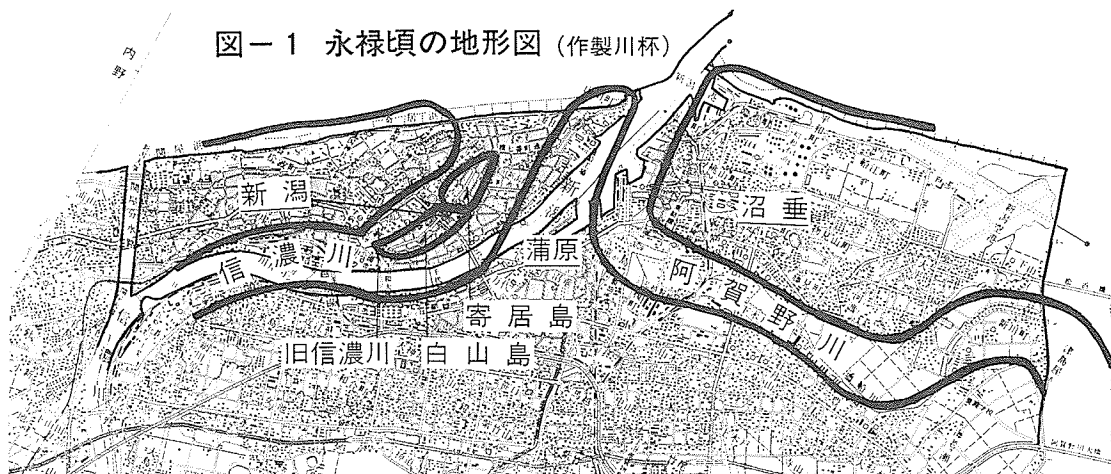
(1) 自然的条件

新潟は、信濃川と日本海の出合いによって生み出された砂州の上につくられた町である。沖積作用が未が充分に進んでおらない越後平野にあっては、この砂州こそが最も堅固な、安全な基盤を形成していたのである。

1500年代初期において、新潟の町を支えていた砂島は、二つの砂州から成りたっていた。上流側が白山島、

下流側が寄居島と呼ばれた。この二つの砂州が寄り合
って一つの砂島となって、これが新潟島となったので
ある。

図－１ 永禄頃の地形図（作製川杯）



この新潟島の基をなす白山島及び寄居島の形成過程について、私見を加えながら簡単にその経過を検討してみたい。

白山島、寄居島の形成過程を探ぐる一つの例として、元禄時代に発生した16ヶ余の浮州の変遷の模様をみることにしよう。

1633年（寛永10年）阿賀野川上流地域において大洪水が発生し、そのため河口部が信濃川に合流することになった。そして信濃川の河口部には16ヶ余の浮州が発生したのである。

1731年（享保16年）阿賀野川流域の悪水、潜水排除のため、新発田藩が行った分水工事が失敗して、阿賀野川本流は松浜地区から直接日本海に流出することになった。その結果、河口の流量は激減し、流路は乱れて、旧、新様々の砂州が移動や浮沈を起こし、次第に安定しながら右岸側は流作場を形成しながら蒲原、沼垂方面に接近し、左岸側は紡錘形の二つの島となって新潟島に接近していった。

このようにして新潟島に附着していった砂州は、秣島、廐島、上島、下島等の名称をつけられ、大体1830年（天保元年）頃から開拓され始めたのである。

表－1をみると、浮州の発生から定着、固定し、開拓されるまでに約200年の歳月を要したことになる。

これは阿賀野川合流という特別な条件のもとにつくり出された結果ではあるが、土地基盤が砂であり、つねに洪水を伴う大河の河口部に位置する新潟の状態か

表－1 浮州から開拓まで

1617年（元和3年）	堀直奇による 第一期計画	16ヶ年
1633年（寛永10年）	阿賀野川、信濃川合流 浮州発生する	
1655年（明暦元年）	明暦の都市計画	98年
1657年（明暦3年）		
1688年（元禄元年）	元禄時代の繁栄期 浮州約16ヶ	
1703年（元禄16年）		
1731年（享保16年）	阿賀野川分流 浮州再活動する	114年
1845年（天保元年）	開拓始まる	
		212年

らみると、このようなパターンが起る可能性はきわめて強いものと考えられる。

これを一つの参考として白山島、寄居島の発生について検討を加えてみよう。

この白山島、寄居島の発生原因は河川の合流ではなく、恐らく大洪水による河岸欠壊、或いは土砂の流送、堆積がその主なる原因であったらうと思われる。

一応前掲の「元禄時代の例」を借りて、機械的に年代を当てはめてみると、新潟開拓の始りと考えられる1515年（この年代については後で説明する）より約200年以前、即ち1300年頃（正安2年）大洪水があったことになる。

残念ながら、1300年～1500年時代の信濃川流域における洪水の記録を見ておらないので、明言はできないが、阿賀野川流域の洪水の事情を考慮すれば、1400年前後信濃川流域にも洪水の可能性は考えられると思う。〔（註）阿賀野川流域には1384年（元中元年）、1390年（元中7年）に大洪水あり。1406年（応永13年）の間頻々と洪水あり〕

このように洪水を原因として1500年頃、白山島、寄居島の二島に集結して、更にこの二島が接着して新潟島となり、1515年(永正12年)頃には島の状態も安定し、人間の住めるまでに成熟したものであろう。

表一 白山島、寄居島発生経過

1400年(応永7年)前後	大洪水に見舞われ浮州発生する	100年 15年
1500年頃(明応年間)	白山島、寄居島の二島となる	
1515年(永正12年)	新潟島となり開拓が始まる	

浮州発生から開拓まで約115年間の歳月を要したことになる。

先に示した阿賀野川合流の場合の例において、分流から開拓までの期間114年が、白山島、寄居島の115年に一応該当するものと見てよかろう。この結果は、余りに年次が合いすぎて疑問がある。更に調査検討を加える必要がある。

(2) 人為的条件

1507年(永正4年)越後守護代長尾為景(謙信の父)は、守護上杉房能を攻めて、これを松之山天水で自害に追い込んだ。これを怒って1509年(永正6年)兄の関東管領上杉顕定は越後に進入して、為景を越中に追放した。

1510年(永正7年)為景は越中から佐渡に渡り、更に越後に逆上陸して、顕定を六日町長森原に破って、

越後の支配権を掌中におさめた。まさに越後における下克上の最盛期の時代である。

この時、為景逆上陸の地が蒲原津である。

この頃の新潟津は、信濃川の河道が右岸側に片寄り年々河岸欠壊が起こりつつあった時である。それにも拘らず為景が蒲原津に上陸したことは、新潟津がまだ出現していなかったことを意味しているのではなかろうか。

1534年(天文3年)現在の西堀通三番町に法音寺、西堀通四番町に善導寺の二ヶ寺が建立された。このことは、当時既に島には僅かながらも定着した住民のおったことを示すものであろう。

ここで一つの推定を下せば、1510年から1534年の間に、何処から人間が移り住んで来たものと考えられる。

更に、歴史上「新潟」の名前のあらわれるのは、1568年(永禄11年)上杉謙信が村上の本庄繁長を討伐するため、部下の諸將に下した命令書の中に「新潟津に集合せよ」という記録がある。

又、当時の新潟の住人は「何を生活の手段としていたか」を推測してみると、漁業、農業を行っていたという形跡は殆んど見あたらない。最初から廻船を業とする商人の町であったようである。

そのことは又、島に移住した最初の人々が廻船業者であったことを示すものであろう。

(3) 歴史的條件

図一 3ヶ津の位置 (作製小林)



新潟を知るためには、「三ヶ津」と言われた沼垂、蒲原の二つの津との関係を見ておかなければならない。

沼垂津は阿賀川の右岸、蒲原津は信濃川の右岸、新

潟津は信濃川の左岸にあって、夫々港まちとして存立していた。

沼垂は、⁽⁵⁾淳足柵によって古代史の中で大きく浮び上がってくる。日本書紀によれば、今から凡そ1300年以前、647年（大化3年）に「淳足柵を造り、柵戸を置く…」と記されている。

658年（斉明天皇4年）阿部比羅夫の蝦夷大遠征が行われ、この時、大和朝廷の北方経略には淳足柵の輝かしい功績があったものと思う。論功行賞として柵造大伴君稻積に対して小乙下の位を与えられたという記録がある。

初期には軍事的都市の傾向がみられたようだが、阿賀野川水系の物資流通と海上交通との結節点として、以来延々と繁栄を続けてきたのである。

蒲原津は、⁽⁶⁾927年（延長5年）編纂された「延喜式」のなかに「主税という諸国から納める租税物資を都に運ぶための公津」として記載されている。

平安貴族の生活を支え、平安文化の華を咲かせた陰の力となって栄えていたものであろう。淳足津とともに古代大和朝廷の東北経綸の重要拠点であった。

南北朝時代をむかえて、蒲原津は越後における主戦場と化し、戦火の洗礼を受け、兵馬の蹂躪に会って、次第に衰亡の道をたどることとなった。

新潟津が誕生して以来、この三者の鼎立は永くは続かなかった。信濃川の猛威や、南北朝の戦乱に捲きこまれた蒲原津が先ず脱落し、ついで沼垂津が阿賀野川の洪水によって衰退していったのである。

新潟のみが戦国時代の戦火をくぐり抜けながらも、信濃川や、時代の推移の恩恵を受けながら、新興の力強い躍進を遂げたのである。

特に、長岡の城主堀直寄の領有となった新潟は、一躍大飛躍の好運をつかみとったのである。

2. 堀直寄の略歴⁽⁷⁾

直寄は1577年（天正5年）12月26日、美濃国厚見郡西部に生れた。

父は堀監物少輔直政、母は織田信長の馬廻り300石宇佐見吉左衛門祐実の女である。後に妙泉院と称された。

妙泉院は家格の違いから側室となったが、最初に生れたのが直寄である。その後直政に正室が入り、嫡男

雅楽助直清が生れた。そして嗣子は直清と生れた時から決められた。

1590年（天正18年）豊臣秀吉は小田原の北条氏を討つために大軍を率いて出陣した。その折、直寄は秀吉に召し出され小姓となった。時に14才であった。

1592年（文禄元年）朝鮮遠征に際しては、秀吉に従って肥前名護屋に出陣し、更に1597年（慶長2年）の再遠征に際しても、秀吉の膝下にあって、秀吉から大遠征の意義や、その構想等を聞く機会に恵まれた。特に、外国との貿易の中に武力以上の大事なもののあることを教えられた。

堀一族の主家、堀秀政は小田原攻略戦の最中病床に倒れた。その長年の功績によって、子秀治が越前北ノ庄（福井）29万石の城主となった。

1598年（慶長3年）上杉景勝の会津移封にともない、その後を継いで、堀秀治が越後春日山45万石の城主となり入封した。その際、直寄も秀吉の元を離れ、越後に移り、坂戸城2万石の城主となったのである。

この時直寄22才であった。

1600年（慶長5年）徳川家康と石田三成との関係が愈々陰悪となり、景勝の三成に同調する動きがあらわになると、家康は景勝討伐の軍を起し、精鋭を率いて小山に進出した。この虚に三成の挙兵があり、家康は一転して西上し、関ヶ原の決戦へと駒を進めた。

越後の堀秀政は、上杉の智将直江兼統の謀略煽動によって、蜂起した越後領内の上杉遺民一揆の掃討を行い、家康西上の背後の安定を確保した。

この一揆掃討における直寄の奮戦は、智略武勇ともに抜群のものがあつた。

しかし、直寄はこの一揆掃討のため、武将としては最高の機会であった世紀の決戦、関ヶ原の合戦に直接参加することが出来ず、歴史の舞台で華やかな名を残すことができなかった。不運という以外に言葉もない。

1508年（慶長13年）父直政が亡くなると、兄直清との間に政務上の確執があり、それが原因となって、ついに堀家の内紛となり、堀家は改易されて、直寄もまた信州飯山4万石の城主に移封された。

関ヶ原戦以来、直寄は徳川の陣営に参加して、涉々と家康、秀忠の信頼を得るようになり、1614年（慶長19年）大阪冬の陣、1615年（慶長20年）大阪夏の陣においては赫々たる戦功を挙げて、徳川陣営の中に強固

な基盤を築き、外様大名の不利な立場を克服していった。

1616年(元和2年)多年の功績によって、家康の死の直後、直ちに8万石をもって長岡城主に栄転することになった。この時直寄40才であった。

憶えば、この長岡8万石の所領の中に、新潟の地が含まれていたところに、家康、秀忠の言外の意味があったように思われる。

幕府が、関ヶ原戦後、全国の大名や幕領の再配置を行い、強力な幕藩体制を確立するために、海運の流通網整備の必要を感じて、日本海方面の海運に対して、秘かに直寄に期待していたものがあったのではなかろうか。

1618年(元和4年)4月、直寄は10万石をもって村上城主に栄転した。

この間、長岡に任わずか1年10ヶ月の間に直寄は我武者羅な活躍をなした。

先ず、第一に長岡城の新築、新潟のまちづくり、江戸城改築に応分以上の協力、その他内政として信濃川の船道の制定等々。

このような活躍は直寄が40才代の働き盛りであったことにもよるが、徳川の天下の永続性を先見し、一方外様大名として、改易の嵐の中にある立場を知り、この将来と現実の対応について懸命の努力を傾注したものであろう。

1639年(寛永16年)6月29日、63才をもって江戸駒込の別邸において多彩な一生を終ったのである。

3. 直寄着任時代の新潟の現況

直寄が長岡城主に着任した頃の新潟の状況を簡単にながめてみよう。

(1) 地形の状況

角田岬から村上に至る強大な海岸砂丘が、西南から北東に向って連なる、その中央部に新潟は位置している。

信濃川は、長岡・三条方面から北に向って流下し、現在の関屋分水路附近で砂丘に突き当たると、その流路を北東に向け、砂丘の背面に平行して流下し、日和山附近で海に注いでいる。

河口部に新潟島があって、信濃川は旧信濃川と新しい信濃川の二川に分かれる。旧信濃川は砂丘と新潟島の間を流れ、西川ともいわれた。新しい信濃川は新潟島の東側を流れ、信濃川の本川となっている。

旧信濃川は、既に上流側分流口(現在の県庁附近)下流側の合流部(現在の御菜堀)ともに土砂の堆積が進み、水深も浅くなり、巾員も狭められ、流入水量も著しく激少していた。

その中央部分は袋状となり、荒廃して流水は停滞し殆んど葦野地に覆われていた。ただ、新潟島に添ってわずかに水路を形成し、その中央部に新潟の港が活動していたのである。

又、水路の北側には自然堤防状の砂州が形成され、その上には、既に16ヶ寺の寺院が建立されていた。

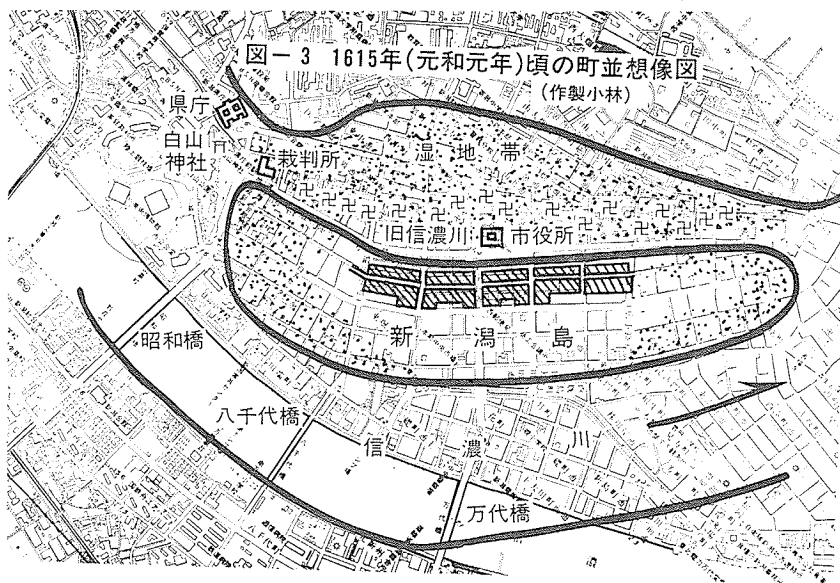
新潟島は、長さ約20町(約2km)巾約5町(約500

m)の紡垂型をしており、これは白山島と寄居島の合体したものである。

島の中央部は既に成熟しており、その旧信濃川添えに一条の町並みが建ち列んでいた。

(2) 町並みの状況

新潟の町の誕生は大体、1515年(永正12年)頃と考えられる。(次の項で説明する)文獻的には、1534年(天文3年)法音寺・善導寺の二寺が建立されたと記



録されている。

従って、この時既に若干の町並が成立し、水運関係にたずさわる商家が建ち列んでいたものと思われる。

1551年(天文20年)上杉謙信は新潟、沼垂、蒲原の三ヶ津に横目代官を置いて管理したという。「越後治乱記」によれば「日本二番の湊にして、信濃の筑摩(千曲川)、犀川、会津の揚川(阿賀野川)その他の大河落ち合って、町家も二千余軒に及び、諸国の商人、舟多く、土方よりこの湊に寄るなり」と記載されている。戦記物の表現は、いささか誇張されているとは言うものの、この時代になると可成りの町並ができていたものと思われる。

又、1568年(永禄11年)には、謙信が村上の本庄繁長を討つ時の、武将の集結基地として新潟を選んでおり、1581年(天正9年)、景勝と新発田重家の戦いの際には、重家は新潟に砦を築き、新潟の町人全員を人質として砦の中に取り込んだ、とある。町人まで捲き込んだ新潟の町の争奪戦が行われたのである。

一方、新潟の町の発展の盛んなことを表わすものとして、寺院の建立の模様を見逃すわけにはゆかない。

表一3 寺院建立表⁽⁹⁾

1534年	(天文3年)	法音寺	現在	西堀三番町
"	(")	善導寺	"	" 四 "
1553年	(天文22年)	宝亀院	"	" 九 "
"	(天文年間)	長善寺	"	" 六 "
1560年	(永禄3年)	瑞光寺	"	" 三 "
"	(永禄年間)	不動院	"	" 四 "
1571年	(元亀2年)	真亀院	"	" 八 "
1575年	(天正3年)	長照寺	"	" 五 "
1596年	(慶長1年)	真宗寺	"	" 九 "
"	(")	宗現寺	"	" 七 "
1604年	(慶長9年)	泉性寺	"	" 十 "
1605年	(慶長10年)	勝楽寺	"	" 八 "
1606年	(慶長11年)	光林寺	"	" 五 "
1607年	(慶長12年)	北山浄光寺	"	" 五 "
"	(慶長年間)	正福寺	"	" 七 "
1615年	(元和1年)	真浄寺	"	" 二 "
1616年直寄長岡城主となる				

現在西堀通り全体で23ヶ寺の寺院の建立がみられるが、そのうち16ヶ寺が、1615年までに建立されている。即ち、1534年法音寺、善導寺が建立されてから約80年間に16ヶ寺。5年間に1ヶ寺の割合で建立されていたのである。

1615年(元和元年)当時の町の規模を想定してみよう。

島の大きさ 長2,000 m × 巾500 m = 1,000,000㎡

(30万坪)

成熟している土地、長850 m × 500 m = 425,000㎡

(13万坪)

町並み地積、長850 m × 奥行、両側100 m = 85,000㎡

(2万5千坪)

人口については

一軒当り間口 8 m (4間) とすると

(長850 m ÷ 8 m) × 両側2 ≒ 200 軒

一軒当り5人とすると

200 軒 × 5 人 = 1,000 人

要約してみると、町並み可能な成熟した土地、約425,000 ㎡ (約13万坪) の中に町並を形成している面積が、約85,000 ㎡ (2万5千坪)、ここに200 軒の建物と、1,000 人の人々が生活していたことになる。

寺院の建立は、旧信濃川の自然堤防の砂州の上に存することから、一見計画的に整理されたように見えるが、これは自然に建立されていったものと思われる。

4. 直寄の都市計画

直寄は新潟島開発に当って、二つの基本的な問題を考えた。

一つは、技術的な問題として、急激に大型化している船舶の規模、及び船隻の増加、このような事態に、旧信濃川にある港湾施設がこれに対応することは、恐らく不可能であろう。そうすると、どうしても信濃川本川側に港湾機能を集中しなければならない。

即ち、新しい港づくりと、それに対応する町づくりである。

同時に、旧信濃川方面の港及び町並みを、一挙に衰退させるような事態を招いてはならない。

そのための技術的問題である。

二つめは、直寄自身の立場が外様大名であるという点である。

若し、港湾開発の大構想が幕府や近隣の諸大名に対して、大きな刺激剤となると、どんな災難が振り注いでこないとも限らない。

従って、開発目標は、幕府、諸藩の米の集荷輸送基地という、解り易い目標を掲げなければならなかったことである。

このような政治的な配慮である。

直奇は1616年(元和2年)7月、長岡城主に着任すると、ただちに「新潟諸役用拾之覚」を公布して、九種類の税を廃止し、町民の活動意欲を発揮させ、同時に町の行政を町民の自治活動にまかせた。

(10)

新潟諸役用拾の覚

1. 沖の口船役の事
1. 商人役の事
1. あへ物役の事
1. むろ役の事
1. てんひん荷付役の事
1. あさそ役の事
1. 蔵役の事
1. 節供酒手役の事

長岡城主着任後、一ケ年の時間をついやして1617年(元和3年)7月1日、新潟の町づくりの基盤となる「新潟新町、材木町建設覚」を発表した。

「覚」のうち、主なる事項だけ抜萃してみよう。⁽¹¹⁾

新潟新町材木町建設覚

1. 新潟の新町につくる家は9月15日以前に新築しなければならない。もしそれまでに家を建てず空地にしておくならば取り上げて他の者に与えるであろう。
1. しかし本町通や片原町に現在ある土蔵や座敷までこわして新町へ移転してはならない。
1. 古町通に住んでいる者でも、隠居している者、子ども、小前の者などは新町へ移転

してけっこうである。

1. 材木町は希望するなら、誰でも家を建ててけっこう。今後竹、板、丸太などはこの町に陸揚げすること。
1. 二の町のうち片原町にはまだ空地がある。
1. すべて河岸道三間、そのほか水ぎわまでの地形はしっかりしたものにし、どこの道もよく掃除して置くこと。
1. 州崎町は七月中に家を建てること、もし家をおそくつくり、サケあみをそまつにしたなら処罰する。

この覚え書きをみると、新町、州崎町に対する建設期間が実に短いことに気がつく。

このことは、恐らく事前協議を充分行って、町民に準備を充分に行なわせたものであろう。

直裁果断の直奇が、着任後1ケ年をついやして慎重に実施したところに深慮遠謀の一端をみる思いがする。

(1) 第一期計画

第一期計画は、島全体の開発構想は別として、島の成熟度により開発可能の区域を取りあげ実施したものである。その概要を次に示すことにする。

・ 区域

区域は凡そ次のようなものである。

長辺 現在の鍛冶小路～現在の広小路

約850m = 400間

短辺 現在の西堀通～現在上大川前通

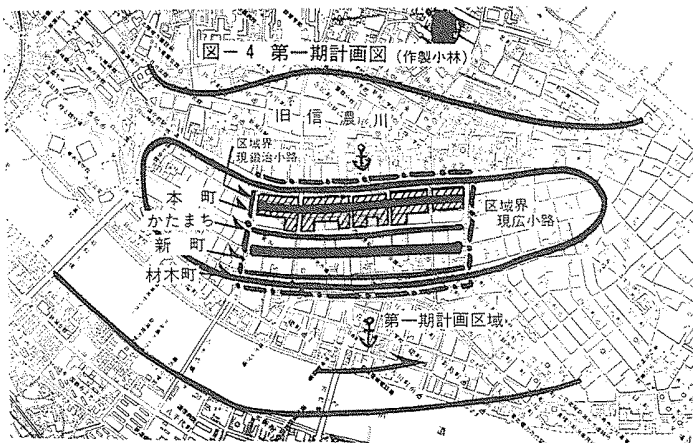
約500m = 250間

面積

$$850 \text{ m} \times 500 \text{ m} = 42.5 \text{ 万 m}^2 \\ = 13 \text{ 万坪}$$

参考

$$\begin{aligned} \text{島全体では } 2,000 \text{ m} \times 500 \text{ m} \\ &= 100 \text{ 万 m}^2 \\ &= 30 \text{ 万坪} \end{aligned}$$



。 港計画

特に、岸壁等の構造物はなく、荷揚場を兼ねた道路施設が主なものである。重要なものは船舶が安全に淀船できる水深と広さである。

信濃川の本川側は、新町に対応する前面河岸及び材木町河岸を港湾区域とした。

。 道路計画

本町通（現在古町）巾員 3 間（従来からの街筋）

新町通（現在本町）巾員 3 間（新設の街筋）

かたまち（現在東堀通）巾員 3 間

材木町通（現在上大川前通）巾員 3 間

（信濃本川に接着し、荷揚場を兼ねる）

本町裏通り（現在新古町）巾員 1.5 間

その他

この時、町名を附し、一路称一町名とした。道路計画は、全島の開発をみこんで、現在の鍛冶小路及び広小路の線で止めた。

横に結ぶ計画は無い、船から揚げた荷物を街まで搬入する小路が自然に発生した。

。 堀割計画

第一期計画の中では計画に載っていないが、直寄の構想の中では一応の案が出来あがっていたように思われる。

イ 旧信濃川の整備改善によるもの（現在西堀）

ロ 島の上流部の整備改善計画（現在一番堀）

ハ 島の下流部の整備改善計画（現在御菜堀）

ニ 旧信濃川の港の衰退を防ぐため、信濃川本川と結ぶ堀割（現在の二番堀、四番堀）

ホ 堀割巾員は、10m～12m

。 人口計画

人口推計を街の大きさから推計してみよう。

一宅地の規模 間口 8 m

奥行 40 m

面積 320 m²

とする。（間口、奥行は現在の宅地規模から推定した）

本町（現古町）道路延長 850 m

$850 \text{ m} \div 8 \text{ m} = 106 \text{ 宅地分}$

道路の両側に建築されているから

$106 \text{ 宅地} \times 2 = 212 \text{ 宅地}$

新町（現本町）

本町と全たく同じ 212 宅地

かたまち（現東堀）（建築規制で片側だけ街並あり）

街並は片側だけであるから 106 宅地

材木町（現上大川前通）

片側は信濃川に接しているので片側町、

従って 106 宅地

宅地合計 636 宅地

今一戸当たり 5 人とすれば

人口は $636 \text{ 戸} \times 5 = 3180 \text{ 人}$

実際には、横に入る道路、住家等宅地として利用し、利用出来ない土地があることから

第一期計画の

宅地数 600 戸

人 口 3000 人

位の規模とみるのが至当と思われる。

。 その他

この第一期計画の中で少し異色のものは「かたまち」である。

その趣旨は、新町（現本町）の形成は充分でないが、将来性を買われて本町（現古町）方面から次第に乱開発されてゆく傾向がみられる。

これを防ぐため、新町（現本町）と本町（現古町）の間に「かたまち」を設け、本町（現古町）側は建築を許可するが、新町（現本町）側は建築禁止区域に指定した。

こうして将来の発展に対処する。言いかえれば今日の建築規制を実施したのである。

この措置が、明暦の都市計画実施に当り、大きな効果を発揮し、建物移転を行わずして、空地の部分に東堀の堀割りが容易に出来あがったのである。

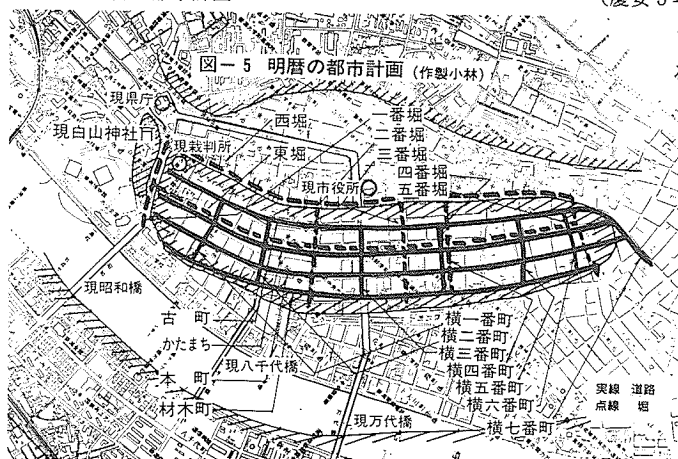
第一期計画のもう一つの特徴は、本町（現古町）の両側背後にせまい裏通りがあることである。

この裏通りも、本町（現古町）の乱雑な発展を防止すると同時に、古くからの本町（現古町）の権威をまもる表現であるようにも思われる。新町（現本町）材木町（現上大川前通）方面は一宅地で貫いた宅地割りである。明暦の都市計画においても裏通りは実施されなかった。

又、第一期計画では一道路、一町名という至極く簡単な町割りであるが、ようやく町の体裁をととのえた

のである。

(2) 明暦の都市計画



1617年(元和3年)第一期計画を実施してから、
1655年(明暦元年)明暦の都市計画を実施するまでの
38年間に、

家屋 411 軒増の 1,011 軒
人口 2000 人増の 5,000 人 (12)

の都市規模に発展した。

その主なる原因は、信濃川本川側の港の開発、新町かたまち、材木町の建設によることは勿論であるが、1633年(寛永10年)大洪水⁽¹³⁾によって、阿賀野川が信濃川河口に合流したため、河口の水深が従来の4～5尺から、一挙に23尺にも増大し、港は年間を通して活動することが可能となったのである。

阿賀野川合流直後の1638年(寛永15年)には、本町(現古町)の上流部の草原を拓いて神明町が建設され、又、下流部には緞治町、御菜堀下が建設された。新町(現本町)の下流部にも十七軒町、十四軒町、御菜小路が誕生した。

このように街並みは急激に拡大され、第一期計画区域を越えて発展していったのである。

この状況をみて、当時の長岡藩主牧野忠成は、直寄の全体構想をそのまま実施することにしたのである。

残念ながら直寄は、この実施を見ることなく1639年（寛永16年）63才をもって亡くなり、忠成もまた明暦を迎える直前1654年（承応3年）2月16日、74才で亡くなった。

したがって、明暦の都市計画は二代忠成が実施した
ような型になるが、記録を探究ってゆくと初代忠成の

時代、既に事業に着手されていたものがみられる。

大体、明暦の都市計画は、明暦年間を挟んで1650年（慶安3年）頃から、1660年（万治3年）頃の間、約7～8ヶ年ぐらいの期間で実施したものである。

その内容を簡単に示すことにしよう。

- 区域及び人口推計

島の大きさは、長さ約 2000 m、巾約 500 m、面積約 100 万 m² (30 万坪) である。この島全体を対象として実施されたのである。

長さ 間口 両側 本町かたちまち
↓ ↓ ↓ ↓
 $\{(2000 \text{ m} \div 8 \text{ m}) \times 2\} \times 3 = 1500 \text{ 軒}$
 $1500 \text{ 軒} \times 5 \text{ 人} = 7500 \text{ 人}$

この時代になると、1人で数宅地分所有する豪商も出現し、米蔵、一般倉庫等の施設が整備されてきたので、純宅地は80%ぐらいとみてよからう。

家屋数 $1500\text{軒} \times 80\% = 1200\text{軒}$

人 口 $1200\text{軒} \times 5\text{人} = 6000\text{人}$

上記の数は、一応収容能力とみるべきもので、既に1655年(明暦元年)の実数は、家屋数1011軒、人口約5000人であるから、収容人口6000人の83%にも達していたのである。

○ 港及び堀割

港の状況は、阿賀野川合流以来、本川側の水深増加によって、その機能は増強され、年間を通じて大型船の出入が可能になったため、物資の輸出入は急激に増加していった。

旧信濃川は、上・下流部の出入口が土砂に埋没し流路全体が荒廃して、機能は急速に衰退していった。この港に対応する本町（現古町）も次第に商賈の衰退を示し始めたが、第一期計画当時から豪商が多く、財力の蓄積もあり、政治的にも行政的にも新潟町の中心的存在をなしていたため、これをそのまま放置しておくわけにはゆかなかったのである。

ここに信濃川本川と旧信濃川を水路で結び、両港の一体的運営を計り、機能増進を計ろうと、掘割計画が浮上してきたのである。

その概要を次に示めそう。

島の全周辺を活用するもの

上流部 一番堀（白山堀）

下流部 五番堀（御菜堀）

本川側（全長）

旧川側 西堀（全長を整備して堀割）

本川と旧川を結ぶもの

二番堀（新津屋堀）└ 旧川側の機能増進の

四番堀（広小路堀）└ ため

三番堀は当初計画には含まれていなかったが、二、四番堀を掘削してみたが効果が上らないので、更に本町（現古町）の中央部に直結するように3年後、1658年（万治元年）に実施した。

東堀の意味

旧川の回復は極めて困難であると考え、本町（現古町）の救済のため、裏側に堀割を配することによって効果をねらい、更に、かたまち一帯の活性化をもねらいとしたものである。

表一 堀割の表 (14)

名 称	巾員	延長
一番堀（白 山 堀）	12 間	178 間
二番堀（新津屋堀）	10 間	247 間
三番堀（新 堀）	10 間	253 間
四番堀（広小路堀）	10 間	225 間
五番堀（御 菜 堀）	10 間	192 間
西 堀（旧信濃川）	10 間	862 間
東 堀	10 間	925 間

東堀西堀の両岸道路は、1684～88年（貞享年間）夫々3間づつ埋め立てられ道路とした。

。 道路計画

第一期計画で建設した、本町通（現古町）、かたまち（現東堀）、材木町（現上大川前）を夫々鍛冶小路、広小路より上下流方面に延長し、道路網の基幹となし、これに横に7本の小路を配して、全体の道路網とした。

表一 5 道路の表

横一番町	現古町二番町にある
横二番町	（鍛冶小路）
横三番町	（砥谷小路）
横四番町	（坂内小路）
横五番町	（風間小路）
横六番町	（甚九郎小路）
横七番町	（横七番町）

縦の「通り」の各路線は夫々巾員3間

横の「小路」の各路線は6尺～9尺

。 町名変更

第一期計画の際には、一路線一名称であったが、町域の拡大化、社会、経済事情の複雑化にともない次第に不便をともなってきたため、明暦の都市計画を契機に一挙に町名変更を行った。

その中で、最も特徴的なものは

本町を 古町

新町を 本町

としたことである。

又、従来の一路線一町名を細分して、数丁名に変更した。

古町通りを取りあげて例示してみよう。

表一 6 町名変更の一例

第 一 期 計 画					本 町 通								州 崎 町
明暦都市 計 画	古町通り神明町				古町通 二ノ丁	古町通 三ノ丁	古町通 四ノ丁	古町通 五ノ丁	古町通 六ノ丁	古町通 鍛冶町	古町通 新田町	古 町 通 橋下新田	古州崎町
現 在													
	古町通 一番町	古町通 二番町	古町通 三番町	古町通 四番町	古町通 五番町	古町通 六番町	古町通 七番町	古町通 八番町	古町通 九番町	古町通 十番町	古 町 通 十一番町	古 町 通 十二番町	古 町 通 十三番町
	古町通 一番地				鍛冶 小路					広 小 路			御 菜 堀

上
流
側

下
流
側

5. おわりに

明暦の都市計画が完了して、港の機能を大いに向上させ、新潟港の重要さを全国的に高めることになった。

その頃、国内は鎖国体制も次第に確立され、一方、寛永年間を通して襲われた飢饉、火災等の社会不安も治まり、幕藩体制もようやく形を成してきた時である。

農業生産の商品化により、商品流通も盛んとなり、全国市場を形成するような状況となり、京都、大阪の商品経済力は益々強力となってきた。更に、参勤交替を通して江戸の発展も爆発的となり、1661年（寛文元年）には信濃川、利根川、江戸川を結んで、新潟から江戸に物資直送をもくろんだ驚ろくべき計画が立案され、幕府の許可を得たのである。残念ながらこの案は実現しないで終ったが、当時の国内経済の一断面を示すものだろう。

この計画とは別に、日本海を舞台とする河村瑞賢による西廻航路の開発が行われ、1672年（寛文12年）には酒田港から第一船が出航して江戸に向ったのである。

このような社会的背景の中で、新潟港は急速にその威力を発揮し、1697年（元禄10年）には、移入貨物総額46万2000両、年間入港船舶3500隻、その関係する地域40ヶ国に及び、その繁栄振りは将に目を見張るものがあった。

そのため、街の規模も拡大され、凡そ人口7,000人家屋2500軒となり、明暦の都市計画は既に満杯の状態となったのである。

直寄の企画性、先見性が美事開花し、新潟の発展を大きく推進したものと言ってよいであろう。

<参考文献>

- (1) 上杉謙信と春日山城 花ヶ前盛明 新人物往来社 1984. 8. 20
- (2) 新潟市史 新潟市
- (3) " "
- (4) 新潟市史読本 新潟市郷土資料館 1979. 3. 31
- (5) " " "
- (6) " " "
- (7) 堀家の歴史 堀 直敬 堀家の歴史研究会 1967. 11
堀直奇と長岡 稲川明雄
- (8) 新潟市史読本 新潟市郷土資料館 1979. 3. 31
- (9) わが町の歴史新潟 小林 武 文一総合出版 1979. 3. 10
- (10) 新潟市史読本 新潟市郷土資料館 1979. 3. 31
- (11) " " "
- (12) わが町の歴史新潟 小村 武 文一総合出版 1979. 3. 10
- (13) 新潟市史読本 新潟市郷土資料館 1979. 3. 31
- (14) 新潟の街 歴史散歩 沢村 洋 新潟日報事業社 1978. 6. 10
- (15) " " " " "